

子どものための参加型音楽プログラムの構成要件

ーロンドの理解を目指した〈音楽のサンドウィッチをつくろう〉を事例としてー

Criteria for a Participatory Music Program :
Teaching children to understand the rondo

菅 道子

KAN Michiko

(和歌山大学教育学部音楽教室)

抄録

本稿は、音楽理解における身体表現の有効性並びに芸術における提供者（演奏者）と享受者（鑑賞者）との協同創造を実現するためのプログラムの構成要件について、小学校児童を対象とした参加型音楽プログラムの企画、実施を通して検討したものである。音楽テーマには「ロンド形式」を採用し、「協同創造」型の具体策としては、カール・オルフの〈リズム・ロンド〉の創作とアンサンブルを取り入れた。実施した和歌山市立貴志小学校での音楽プログラムでは、鑑賞したロンド形式のエピソード部分を児童自身らが口唱歌で唱えたり、創造的なリズム表現活動によって、鑑賞した音楽に児童らが参加する喜びを生み出していた。これらを含んだ聴く（鑑賞）、奏でる（器楽）、歌う（歌唱）、創る（創作）、動く（身体表現）といった活動を融合的に取り入れることは児童のロンド形式の理解を深め、聴き手、奏で手、創り手の境界を越える「協同創造」型を志向する活動に必要な要件となっていることを指摘した。この複数活動の取り入れを含めた7点を参加型音楽プログラムを構成する要件として提示した。

キーワード：ロンド、アウトリーチ、協同創造、身体表現、オルフ

1. はじめに

筆者らは、専門科目【芸術教育普及活動論】（2009年までは生涯学習課程の基礎専門科目であった芸術教育普及活動論演習Ⅰの名称）または教科外活動として、参加型音楽プログラム（コンサート）の企画・実施を通して学生の実践的指導力の形成を図る取組みを行ってきた。

この参加型音楽プログラムは〈アウトリーチ outreach〉の考え方を取り入れたものである。アウトリーチは「より遠くへ達すること、通常の活動範囲から踏み出すこと」を原義とする芸術普及の考え方を指しており、「芸術の提供者と享受者が対等な立場で一緒に楽しむ」ことを基本スタンスとしている²。2007年3月に和歌山市立貴志小学校で実施した参加型音楽コンサートにおいても、ドイツの作曲家カール・オルフ（1895-1982）の提言した、音楽とともにことばと動きをもつElementare Musik（原初的な音楽）の考え方に学びながらプログラムを構成した³。そしてアウトリーチの理念を活かした音楽コンサートあるいはプログラムとして、誰もが音楽の聴き手になり、弾き手になり、創り手になるという演奏者と鑑賞者という境界を越えて協同的音楽創造を構築する活動を一モデルとして考

えるようになった。また、この活動においては、児童理解、音楽を創り出すプロセスを学びながら、参加学生が教育実践者としての力量形成を図ることを目指している。

近年こうした音楽普及の取り組みについては音楽のアウトリーチ活動の他にも、参加型音楽コンサート、参加型音楽プログラム、音楽ワークショップなど、様々な呼び方があり、筆者自身もどの名称がその内容を適切に示すのか探っている段階である。音楽の「アウトリーチ」という用語は日本での言葉の定義付や活動としての定着度も未だ途上にある。一方「コンサート（演奏会）」の用語は、『大辞林』によれば「演奏を多くの人にきかせる」ことというように⁴、演奏者と鑑賞者の区分を前提とする意味合いをもって説明されている。「ワークショップ」の用語は、①「作業場」「工房」、②「研究集会」、「講習会」の意味をもち「組織の枠を超えた参加者による講習や実験的な舞台作り」と説明されている⁵。この場合には参加者が主体となることが明確であり、本稿で取り組もうとするものと共通性もっている。ただし、『大辞泉』をみるとワークショップには「参加者が専門家の助言を得ながら問題解決のために行う研究集会」との意味もあり⁶、参加者と専門家（企画者）との関係をどう定義していくのか課題が

残る。

そこで、今回は暫定的に「物事の予定。行事の進行についての計画」という意味の「プログラム」の用語を使った⁷。これは提供者と享受者との関係性については示していない用語であり、「協同創造型」の音楽活動の進行予定、構成のあり方を探るという点で妥当な用語と考えられるからである。しかし、最終的には音楽活動の中で提供者（演奏者）主導によって部分的に手拍子や歌唱を共に行うような「参加」型ではなく、提供者（演奏者）と享受者（聴衆者）の境界を越える「協同創造」型のあり方を探求することが本取組みの課題である。

本稿は、2009年12月和歌山市立貴志小学校の第4学年児童を対象に実施したプログラムについての記録を通してこの課題を含め参加型音楽プログラムを構成する上での要件について検討しようとするものである。尚、参加児童らのうち一部（当時第2学年1組）は、2007年3月6日にカノンのテーマで参加型音楽プログラムに参加し、継続イベントとして実施している。また音楽指導については、「芸術教育普及活動論」の協同担当者である山名敏之氏の協力を得て行った。

2. 参加型音楽プログラムづくりの要件

筆者らは、これまでの実践から、参加型プログラムを成立させるため要件について検討し⁸、次の5点を提示した。

- 〈1〉スタッフの多様性（複数専攻の学生）の確保
- 〈2〉ストーリー性（相互の関連性）をもったプログラム構成
- 〈3〉音楽テーマの明確化
- 〈4〉芸術の提供者（演奏者）と享受者（鑑賞者）の「協同創造」の場の設定
- 〈5〉その他の留意点 身体表現を取り入れること、視覚的な工夫、遊びの世界をつくること等

〈1〉スタッフの多様性の確保については、今回は教科外活動ということもあり、音楽専攻学生の集団で取り組んだため、実現できていない。

〈2〉ストーリー性（相互関連性）をもったプログラム構成は、コンサートあるいはプログラム全体の統一性と音楽活動への主体的取組みを促進すると考えられる。それはこれまで実施してきたお話仕立てのプログラム〈動物の音楽隊〉（2001）、〈静かに聴くぞう〉（2005）、〈どうぶつのおとえほん〉（2009）の展開において見られた様子であった。一方中高学年になった場合には、ストーリー性をもたなくとも、音楽内容の関連性によってプログラム全体を包括することで、主体的取組みを促進することが可能な面があるとも考えられた。

〈追いかけてこしよう〉（2007）はその一例であり、今回も音楽の相互関連性を図ることとした。

〈3〉音楽テーマの明確化は、児童生徒の興味を惹く

活動を優先的にしていくと音楽内容についての吟味が十分できず、初期段階から課題になっていたものであった。今回音楽テーマとして取り上げたのは「ロンド形式」である。前述した原初的な音楽（エレメンタル・ミュージック）を提唱したカール・オルフの音楽教育では音楽形式の理解とそれに則った音楽づくりとして、カノンと同様にロンド形式を用いられることが多い。

ロンド (rondo) 形式とは、器楽形式の一つで、間にエピソード (episode <英>) またはクープレ (couplet <仏>) といわれる挿入部をはさみながら、主題が何度も回帰する構成をとるもので、通例テンポは急速で、軽快な楽想を特徴とする。3つのエピソードをもつ7部分構成 (RARBRAR) が標準的であるが、時代などにより多少の変形もみられる⁹。このロンド形式はカノンの旋律線が複数の声部において独立性と模倣性をもって動いていくのと同じように、主題が何度も繰り返して出現する特性をもち、音楽の構成を理解するのに適した形式となっている。

そこで、今回の参加型音楽プログラムでは、1) カール・オルフ作曲〈リズム・ロンド〉、2) パーセル作曲〈ロンド〉、3) クライスラー作曲〈ベートーヴェンの主題によるロンディーノ〉の3曲を取り上げた。

1) 〈リズム・ロンド〉は手拍子、足拍子を使ったオルフのリズム作品の代表作である¹⁰。構成は ABACADA となり、エピソード部分を創作して挿入することができるため、教材としてもたびたび取り上げられている。一方、こうした身体によるリズム表現はそのリズムの性質を直接に表現するため、慎重に扱うことが必要である。リズムを打つとき、日本的な拍節感のエネルギーは下方、手と手の内側に閉じこもる性質をもっている。そのため手打ちや足打ちの打点をそのまま下方に落さないように、上向きにエネルギーを放出することを意識するよう留意して練習を行った。

2) 〈ロンド〉はヘンリー・パーセル (1659-1695) の作曲した付随音楽「アプデラザール」に付けられた音楽で、ブリテンの《青少年のための管弦楽入門》の主題としても親しまれている作品である。学校音楽ではリコーダーの教材としても登場している。構成は ABACA となる。今回のプログラムではオーボエにピアノ伴奏を付けた¹¹。

3) 〈ロンディーノ〉は20世紀に活躍したヴァイオリニスト兼作曲家であったフリッツ・クライスラー (1875~1962) が、ベートーヴェン作曲の〈ヴァイオリンとピアノのためのロンド〉ト長調 WoO.41 からその主題をとって作曲したものである。ロンディーノは小さなロンドを意味し、構成は AABACAD^{つなぎ} Acoda である。優雅で柔らかな主題をもつ小品である。今回のプログラムでは、ヴァイオリンにピアノ伴奏を付けた¹²。選曲した楽曲の演奏時間はどれも2分~3分程度であり、こうしたアウトリーチ活動でのプログラムでは集中的聴取を実現する妥当な時間として認識されている。

上記のように主としてロンド形式をもった楽曲の鑑賞を踏まえて、後半では参加した児童たちがオルフの〈リズム・ロンド〉のエピソード部分を創って表現するというプログラムを構成し、鑑賞と表現活動によるロンド形式の理解をプログラム全体のテーマとして設定した。児童に対しては主題の間にエピソードを挿入していく形式を理解していくために〈音楽のサンドウィッチをつくろう〉というテーマで提示した。

〈4〉芸術の提供者（演奏者）と享受者（鑑賞者）の「協同創造」の場の設定については、アウトリーチの理念にもとづいた参加型音楽プログラムの内容を成熟させていく上で不可欠の要件になると考える。またこの「協同創造」は創造的な活動を協同で行うことと、創作そのものを協同で行うことと二面で捉えることが必要であろう。創作そのものを協同することは、時間の制限、内容精査の点からも実現のハードルが高い活動であり、これをいかに実現していくかが検討課題である。今回のプログラムではカードの組み合わせの偶然性と表現の工夫を目指しており、実際の創作そのものを協同で行うまでには至っておらず、創造的な活動を協同で行うという段階にある。また、この取組みはオルフの作品を扱ったことにも表われているように、オルフの提示した原初的な音楽（エレメンタール・ミュージック）の考え方に学んでいる。エレメンタール・ミュージックの特質は「決して音楽単独ではありえず、必ず踊りとことばが付いている。それはだれでも演奏でき、聞き役にまわらず、弾き役に加わる音楽」である¹³。それはアウトリーチの芸術における提供者と享受者が「対等な立場で一緒に楽しむ」考え方に通じ、「芸術教育普及活動論」の授業において掲げてきた演奏者と鑑賞者という境界を越えたところでの人と人の協同的音楽創造を構築する活動理念の基底となるものである。

〈5〉その他は上記4要件を整理した後の実践の中で浮かび上がってきた3つの留意点である。

一つは動く（身体表現）活動を取り入れることである。〈追いかけてこしよう〉（2007）では、カノンの時間差で追いかけてくる旋律線をグループの動きやフォーメーションによって表した。これは音楽を主体的に捉える動きであり、児童全体で音楽を視覚化することなど音楽理解を促進する効果があった。

もう一つは視覚的な工夫を加えるということである。今回は〈音楽でサンドウィッチをつくろう〉のテーマが理解できるように、パン・具（卵）・パン・具（レタス）・パン・具（ハム）・パンでサンドウィッチを作るといふ絵図（図1）と、ロンド形式の実際の構成となるA, B, C, D, +, codaの各カードを用意し、演奏の

時間経過にあわせて掲示していった（図2）。

三つ目は、遊びの世界を実現することである。〈追いかけてこしよう〉の動きの活動の中にはグループごとに即興的に歌をつくるエネルギーが内在しており、また動くこと自体が遊びであり、児童たちにこれ以上の分析無用な遊びの本質たるものとしての「おもしろさ」をもつ活動として刻印されていた¹⁴。今回のプログラムはこれらの留意点も含めて検討することとした。

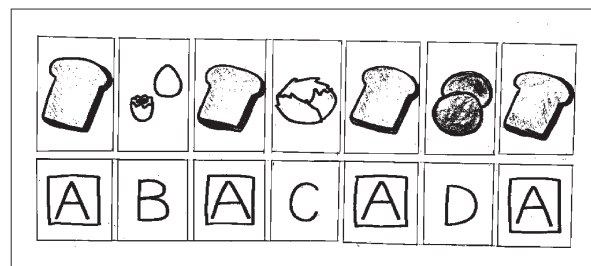


図1 〈音楽のサンドウィッチをつくろう〉の絵図

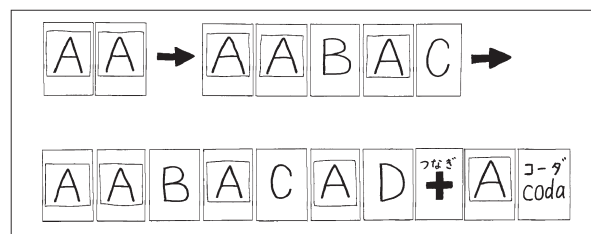


図2 時間経過によってカードを加えていった〈ロンドディーノ〉の構成図

（絵 西桜子）

3. 参加型音楽プログラム〈音楽のサンドウィッチをつくろう〉の実施

3. 1. 参加型音楽プログラム実施までの経過

上記の要件を視野にいたした参加型音楽プログラムの企画・運営は自主参加の学生たちによって準備された。参加者は、和歌山大学教育学部学校教育教員養成課程教科教育コース音楽専攻生3名と生涯学習課程芸術文化プログラム音楽専攻生5名並びにヴァイオリン奏者として和歌山大学管弦楽団のメンバー1名の計9名であった。準備は昼休み、空き時間等を利用して、筆者も同席のもと打ち合わせと練習時間を取り（2009.01.09, 01.16, 01.23, 01.30, 02.04, 02.06）進めていった。リハーサルには「芸術教育普及活動論」の協同担当者である山名敏之氏にも参加してもらい、学生たちへの指導・助言を得た。

3. 2. 参加型音楽プログラムの概要

参加型音楽プログラムは以下の要領で実施した。表

1は〈音楽のサンドウィッチをつくろう〉のプログラム案である。

【1. 日時】2009（平成21）年2月10日（火） 第3時限（10：50～11：35） 第4時限（11：40～12：25）

【2. 場所】和歌山市立貴志小学校 音楽室

【3. 対象】4年1、3組 54名、2、4組 54名（音楽専科 木下由香利）

【4. 演奏・話し手】

学校教育教員養成課程教科教育コース音楽専攻3名、生涯学習課程芸術文化プログラム音楽専攻生5名、和歌山大学管弦楽団（経済学部学生）1名 合計9名

【5. テーマ】〈音楽のサンドウィッチをつくろう〉

表1 〈音楽のサンドウィッチをつくろう〉の参加型音楽プログラムの流れ

時間	活動の流れ	具体的な活動	♪音楽 ♪♪楽器 ◆支援物
導入	1. あいさつ テーマの提示 〈音楽でサンドウィッチ作ろう!〉	①簡単な自己紹介 テーマであるロンド形式の説明 「具をはさむパン（主題A）が何度もでてくる音楽」	◆板書カード ロンド形式 同じメロディーが何度も出てくる ◆パンと具のカード
鑑賞1	2. 手・足拍子によるリズムロンドの鑑賞 ABACADA	②手拍子足拍子を使った音楽の紹介 「サンドウィッチのように具をはさむパンが出てくるか、見つけながら聴いて見て下さい。」 ③演奏 ④気づいたこと、感じたことの発言中から、ロンド形式に気付く。 ・「具をはさむパンみつけた？」 ・「こうやって同じテーマ（主題）の音楽が何度もでてくる音楽をロンド形式といいます。」 （「もしテーマ（主題）のAがわかれば小さくバーを出して、具（エピソード）の部分はグーで、教えてね。」）	♪オルフ〈リズム・ロンド〉 ♪手拍子、足拍子 ◆テーマのカード ◆作曲者と曲名のカード ◆ABACADAのカード ◆揭示： ロンド形式：同じメロディーが何度もくりかえされる。 （◆パン・具・パンのカード）
鑑賞2	3. ヴァイオリンによるロンド鑑賞 AABACAD+ACoda	⑤ヴァイオリンの〈ロンドーノ〉の紹介。 「今度はヴァイオリンの音楽を聴いてみてください。こんなテーマをもっているよ」Vn.のみでテーマ（主題）Aを聴く。 ⑥主題とエピソードの聴き分けについて説明と演奏。 「では、通して聴いてみてね。音楽はクライスラーの〈ロンドーノ（小さなロンド）〉という曲です。 ⑦主題とエピソードについての確認。	♪クライスラー〈ロンドーノ〉 ♪ヴァイオリン、ピアノ ◆曲名カード ◆パンカード ◆AABACAD+ACoda カード
鑑賞3	4. オーボエによるロンド鑑賞 ABACA	⑧オーボエの〈ロンド〉の紹介。 「次はオーボエのロンドを聴きます。前にこの楽器を見たことのある人もいたよね。また、最初のテーマ（主題）Aテーマの部分の吹いてもらいましょう。」Ob.のみ ⑨演奏。 ⑩主題とエピソードについての確認。 「それぞれの曲でパンと具のあることがわかったかな。パンが3回でてきたね。こんな音楽を“ロンド形式”っていうんだよ。」	♪パーセル：〈ロンド〉 ♪オーボエ、ピアノ ◆○揭示物 ◆作曲者と曲名カード ◆パンカード ◆ABACA カード （◆バーとグーのモデル）
展開 協同表現の練習	5. 音楽でサンドウィッチを作ろう =リズム・ロンドを作ろう オルフ〈リズム・ロンド〉	⑪〈リズム・ロンド〉の主題の手拍子部分の表現活動 今度はみんなでさっきのリズム・ロンドを一緒にやって音楽（リズム）のサンドウィッチを作ろう ・主題Aの手拍子部分を先奏と模倣で習う ・口唱歌でのリズムを提示。「これから打つよ、ロンド」 「ロンド●、ロンド●」「これから打つよ、ロンド」 ・クレッシェンドもつける。 ★正しくリズムが取れているか、サブは各グループについて見る ⑫全体練習と主題A（パンの部分）の表現の確認 主題Aの足拍子部分を学生の演奏によって提示。 児童が主題Aの上（手拍子）と学生が主題Aの下（足・手）の部分をあわせて主題Aの演奏する。 ⑬主題Aの演奏に続けてエピソードとなるB部分を提示。 「今聴いたリズムはA（パン）B（具）A（パン）になっていましたか?」	○板書カード ロンドを作ってみよう ★1組4人×7班 3組4人×4班と5人×2班：合計54人 13グループ ★2組4人×4班と5人×2班 4組4人×2班5人×4班：合計54人 12グループ ◆リズム・カード ・リズムと叩く部位が書かれたカード。 ・各班に2枚ずつ。 ・楽譜が苦手な児童にもわかりやすいように唱歌をつけておく。

<p>展開 協同表現の練習</p>	<p>5. 音楽でサウンドウィッチを作ろう ＝リズム・ロンドを作ろう オルフ〈リズム・ロンド〉</p>	<p>⑭ロンド形式の確認と創作の説明 ・リズム・カードを引いて指定されたリズムを演奏する 演奏していたB(具)の部分を児童たちに創作してもらう。 「二つのカードを引いて、各班でこの二つのリズムを重ねて打てるようにしてみてください。」 ・「○ ○のカードと△ △のカードをとりました。これを4ずつ繰り返し、1班、2班と繋げてB(具)の部分を創ります。 身体はどこで鳴らすか、大きく鳴らす、小さく鳴らすなどいろいろ考えてみてください。」 ⑮グループ練習の留意点と練習 ・B：4小節間、色々な部位でリズム ・「約束、2クラスのお友達が練習します。練習をするときには、口唱歌も小さな小さな声で、リズム打ちの練習もとても小さな音でやってみてください。」 ・「本番にこんなリズムだったかと、みんなを驚かせてみてください。」 ⑯リハーサル ・1組が主題A、3組がエピソードB、C、D～部分 →1組がエピソードB、C、D部分、3組が主題Aの部分 ・2組が主題A、4組がエピソードB、C、D～部分 →2組がエピソードB、C、Dの部分、2組が主題Aの部分</p>	<p>板書カード 練習方法 ・二つのカードを引く ・一班二つに分かれて声で練習する。 ・リズム打ちで練習する。 ・一班であわせてみる。 ★口唱歌、練習は小さな音で。 Bのソロをしない組についての学生がAの下部分を担当する。</p>
<p>展開 協同表現2</p>	<p>6. 創作したリズム・ロンドのアンサンブルをしよう。</p>	<p>⑰創作したリズム・ロンドをグループごとに発表する。 ・A：1(又は2)組全員で、B：3(又は4)組の1班ずつのソロで演奏する。 ・A：3(又は4)組全員で、B：1(又は2)組の1班ずつのソロで演奏。 ★具の部分をひきたてる工夫(立ち位置など) ・ひと組がパン、ひと組が具となるロンドを行う。全体で2回の演奏。最後はAを2回つづける。</p>	<p>・ABACADA ・ロンドがわかる体形を考えて並ぶソロ(B)の部分を演奏するグループが上手く入りやすいように、「1、2、どうぞ」など声かけをする。</p>
<p>まとめ</p>	<p>7. まとめと終わりのあいさつ</p>	<p>⑱まとめ ・「サウンドウィッチの音楽＝ロンドってどんな感じかわかったかな？ 今度は、声やリズムや笛でも作って遊んでみてください。」</p>	

上記参加型音楽プログラムを実施した和歌山市立貴志小学校(〒640-8441 和歌山市栄谷895-2 田中英明校長)は、大学所在地栄谷にあり、日頃から教育実習、教育ボランティアなどで交流のある学校である。2007年3月には当時第2学年1組であった児童たちを対象にカノンテーマにした〈追いかけてこしよう〉の音楽プログラムを実施しており、その児童らはこうしたプログラムで遊んだことを記憶の留めているとのことだった。

〈音楽でサウンドウィッチをつくろう〉の内容は表2のように、3曲のロンドの鑑賞の後に、オルフの〈リズム・ロンド〉の主題Aの上の手の部分を児童と学生がともに演奏し、その後エピソード部分を各班が2枚のカードを引き、2班で一エピソードをつくる形で演奏できるよう、表現の練習を行い、最後アンサンブルを行うというものである。

このプログラムは2009年2月10日(火)の第3次限目に4年1、3組、第4次限目に4年2、4組を対象に実施した。記録はビデオカメラでの映像記録とともに、終了後児童たちに自由記述の感想を依頼した。

4. 児童の感想から読み取る参加型音楽プログラムの成果と課題

上記〈音楽のサウンドウィッチをつくろう〉の経過と児童らの感想を通して、参加型音楽プログラムにおいて、先に設定した5つの要件がプログラム構成に影響を与えているのか、また今後の相互交流を充実させたプログラムづくりにおいて得られる示唆について検討したい。

表2は、参加型音楽プログラム終了後に担任が用紙を配布し自由記述で書かれた感想を分類したものである。

表2 参加型音楽プログラムについての児童の感想

番号	楽 曲	児 童 の 感 想	4年1、3組	4年2、4組	合 計
1	① 〈リズム・ロンド〉	身体表現に対する驚き・興味：手と足で合奏できるなんてすごい、びっくりした、おもしろそうだ等	5	6	11
2	① 〈リズム・ロンド〉	音色、奏法に関する関心：身体をつかってきれいな音、いろいろな叩き方をした等	2	1	3
3	② オーボエ〈ロンド〉	楽器との出会い：初めて近くで生の楽器を見た等	7	14	21
4	② オーボエ〈ロンド〉	楽器の構造に対する関心：吹き口が細い、ボタンがたくさんあった等	3	3	6
5	② オーボエ〈ロンド〉	楽器の音色に対する関心：力強い音・きれいな音だった、ブーボーという音がした、思ったより低い音だ等	14	11	25
6	② オーボエ〈ロンド〉	演奏法に対する関心：オーボエを吹くのが大変そう、息の吸い方がすごい、上手な演奏だった、オーボエがしゃべっているみたい、ピアノと息があった等	5	6	11

7	②オーボエ〈ロンド〉	形式について：よく聴いてみると同じ音楽が何回もでてきた	0	1	0
8	②オーボエ〈ロンド〉	楽曲に対する関心：いい曲、どこかで聞いたことある曲等	2	0	2
9	③ヴァイオリン 〈ロンディーノ〉	楽器との出会い：初めて生で楽器をみた等	7	16	23
10	③ヴァイオリン 〈ロンディーノ〉	楽器の構造に対する関心：思ったより小さい、弾くところが馬のしっぽみたいだった等	2	2	4
11	③ヴァイオリン 〈ロンディーノ〉	楽器に対する好意：ヴァイオリンを弾いてみたい、弾いたことがある等	2	5	7
12	③ヴァイオリン 〈ロンディーノ〉	楽器の音色に対する関心：きれいな音だった、好きな音だ、キーロキーロという音がした、なめらかな音がした等	17	9	26
13	③ヴァイオリン 〈ロンディーノ〉	演奏法に対する関心：手無しでやっていたからあごの力がすごい、線（弓）の弾き方がすごく、よくそんなのが弾けると思った、上手だった等	6	7	13
14	③ヴァイオリン 〈ロンディーノ〉	楽曲に対する関心：きれいな曲だった	1	0	1
15	③ヴァイオリン 〈ロンディーノ〉	形式について：よく聴いてみると同じ音楽が何回もでてきた	0	1	0
16	④〈リズム・ロンド〉 のアンサンブル	身体表現の喜び1.：手や足でリズムをうつのがおもしろかった、楽しかった等	10	20	29
17	④〈リズム・ロンド〉 のアンサンブル	身体表現の喜び2：言葉でするのが楽しかった等	3	4	7
18	④〈リズム・ロンド〉 のアンサンブル	みんなであわせることが楽しい等	3	3	6
19	④〈リズム・ロンド〉 のアンサンブル	少し恥ずかしかった、やってみたら楽しかった等	7	6	13
20	④〈リズム・ロンド〉 のアンサンブル	いろいろな道具や、音がして楽しかった等	13	6	19
21	④〈リズム・ロンド〉 のアンサンブル	リズムの取り方、タイミング、たたき方、強弱が難しかった等	11	5	16
22	④〈リズム・ロンド〉 のアンサンブル	難しかったけれど、できるようになった等	4	3	7
23	④〈リズム・ロンド〉 のアンサンブル	パンの部分はすぐに覚えられた	1	0	1
24	④〈リズム・ロンド〉 のアンサンブル	授業が終わった後も手をたたいて遊んだ、家でも挑戦したい	1	1	2
25	④〈リズム・ロンド〉 のアンサンブル	叩き方を教えてくれてありがとう等	1	5	6
26	⑤その他	ロンド形式がわかった、ロンドが作れてよかった等	4	9	13
27	⑤その他	最初サンドウィッチは何か？とわからなかった等	4	2	6
28	⑤その他	音楽は楽しいと思った等	6	3	9

4. 1. <1> スタッフの多様性(複数専攻の学生)の確保

先にあげた参加型音楽プログラムの5つの要件に照らしてプログラムの構成をみると次の特徴があげられる。

<1> スタッフの多様性の確保については、今回は、ヴァイオリンの演奏者（和歌山大学管弦楽団員、経済学部学生）以外は教育学部の音楽専攻生の集団で、「芸術教育普及活動論」の授業時のように美術専攻、障害児教育専攻など複数専攻の学生とともに作ることはできなかった。ただし、本番当日の子どもたちとのリズムアンサンブルづくりでは、12、13グループある班のうち、2班に1人は学生を配置したことで、班練習の混乱を回避し、またNo.25「叩き方を教えてくれてありがとう」（6名）といった発言、「また来て下さい」といった複数の感想にみられるように、演奏者との関係づくりの最初の取っ掛かりにもなっていたようである。また、本来スタッフの多様性の確保については、プログラムの作成過程における環境整備の条件であり、今後

は構成上の要件とは別に考えていくことが必要であろう。

4. 2. <2> ストーリー性をもったプログラム構成による鑑賞と表現の相互関連性の効果

今回は「ロンド形式」をテーマとして3曲の鑑賞後、リズム・アンサンブルの表現を音楽の提供者と享受者が共に練習し、発表するというプログラム構成をとった。これは〈追いかけっこしよう〉のプログラム構成と同一で、前述したようにお話し立てではなく、音楽内容の関連性で構成したプログラムである。児童の感想にはNo.26「ロンド形式がわかった、ロンドが作れてよかった」（13名）とあるように、この活動通してロンド形式を知り、表現できたと感じられていることがわかる。とりわけ後半の〈リズム・ロンド〉のアンサンブルのところでの感想が圧倒的に多かったことが特徴的である。一方前半の鑑賞活動ではNo.7、No.15の「よく聴いてみると同じ音楽が何回もでてきた」（各1名）

と Rond 形式について言及したのは同一の児童 1 人だけであった。それより楽器や音色に対する関心が強かったとも言えるが、鑑賞活動で音楽を感受すること、音楽要素や形式などを分析的に聴くこととの両立の仕方について、あるいは両立すべきなのかどうかも含めて今後検討したい。

4. 3. <3> 音楽テーマの明確化による音楽的理解の促進

<3> は、<2> と関連する部分でもあり、各活動を「Rond 形式」という音楽テーマを設定して相互に関連づけた鑑賞と表現活動の構成をとった。前述の No.26 の児童の感想などからも「Rond 形式」の理解が促進されたことがわかる。

その他音楽内容に関連して特徴的なことの一つは楽器について強い関心をもつ児童たちが多かったことである。オーボエの〈Rond〉(パーセル作曲)でも〈ロンディーノ〉(クライスラー作曲)でも No. 3、No. 9「楽器との出会い」(合計 44 名)の感想で「テレビでしか見たことがなかったのでこんなだったんだと思いました」「バイオリンとオーボエを近くではじめて見えて、うれしかったです」(No. 3、No. 9 の一例)というように楽器を間近に見て音楽を聴いたことを喜ぶ感想が多かった。

また No. 5、No. 12「楽器の音色に対する関心」(合計 51 名)が最も多かったことも特徴的である。オーボエの音色について「リコーダーのような音がすると思ったけど、力強い音だったのでびっくりしました」「初めて聞いてとてもきれいな音だった」「ブーボーという音だった」(No. 5 の一例)など、ヴァイオリンでは「とてもきれいな音だった」「バイオリンの音が好きです」(No. 12 の一例)という感想が非常に多かった。さらヴァイオリンは No. 11「楽器に対する好意」で「ヴァイオリンを弾いてみたい、弾いたことがある」(7 名)の感想があったように、児童自ら手にしてみたい楽器であったことがわかる。

さらに No. 6、No. 13「演奏法に対する関心」も多く、オーボエでは No. 6 の「吹いている途中、息がきれるから、すぐに息をすって吹くのがすごかったです」「オーボエは吹くのが大変そう」「唇を口の中に抑えて吹いていたから難しそうだった」(11 名)というように息づかいや発音の仕方など、演奏の気迫がそのまま児童たちに伝わっている。さらにオーボエは No. 4「楽器の構造に対する関心」についても「吹き口が細い」「ボタンがたくさんあった」(6 名)など楽器に関心をもって観察していたことが伺える。ヴァイオリンでも No. 13 の「手無しでやっているからあごの力がすごい」、「線(弓)の弾き方がすごく、よくそんなのが弾けると思った」(13 名)といった感想が記され、身近でみた演奏の姿に惹きつけられている。

こうした楽器に対する児童の高い関心を見ると、音楽のアウトリーチ活動(芸術普及活動)という観点からすれば音楽テーマの明確化とともに、管楽器、弦楽器など児童らが日頃目にすることのない楽器、あるい

はピアノ、シロフォン、太鼓など音楽室にあっても、本格的な演奏を聴く機会がないというような楽器類を複数活用することは、児童の音楽的興味を喚起するのに必要な要件であることがわかる。

4. 4. <4> 芸術の提供者(演奏者)と享受者(鑑賞者)の「協同創造」の場の設定

今回のプログラムでは後半に〈リズム・Rond〉のアンサンブルを児童らと一緒にを行うよう設定した。これは、リズムパターンの提示や練習の誘導などの提供者側からの引率力が強く、「対等な立場で一緒に楽しむ」という「協同創造型」の段階には至っておらず、発展途上にあるものといえるだろう。しかし、少なくともこうした音楽プログラムにおいて享受者(鑑賞者)が音楽を聴くだけでなく、自らも創ること、表現することに参加することで、プログラム内容の受け止め方、理解の仕方が高まっていたことは〈リズム・Rond〉のアンサンブルに関する No. 16 から No. 25 までの感想記述の量の多さからも伺えるだろう。また、前述したように No. 25「叩き方を教えてくれてありがとう」「また来て教えてください、楽しかった」といった感想があるように、相互の関係性の取っ掛かりもできている。

その他〈リズム・Rond〉のアンサンブルを通して心情の変化を生み出していることも特徴である。

No. 19「少し恥ずかしかった、やってみたら楽しかった」(13 名)、No. 22「難しかったけれど、できるようになった」(7 名)のように、実際に表現活動に参加することによって、恥ずかしさや難しいというマイナスの思いが楽しさとできることの喜びへと変化していつている。

さらに No. 28「音楽は楽しいと思った」(9 名)には、「音楽はとても楽しいということがわかった」「僕は音楽が嫌いだけど、手とかでパンパンとやっていたら、嫌いじゃなくなってきました」のように、この活動だけでなく、音楽全般に対する意識の変化が生じた児童がいたこともわかる。

厳密な意味での音楽の協同創造ができなかったとしても提供者と享受者が協同で創造的な音楽活動を作り上げていく方策を見つけ出していくことが音楽プログラムへの参加度を高めるためには必要な要件になると考えられた。

<5>その他については、第一に身体表現を含め、複数の活動を取り入れることが重要であることがプログラムを通して確認できる。

今回の〈リズム・Rond〉のアンサンブルでも、No. 16「手や足でリズムをうつのがおもしろかった、楽しかった」(29 名)、No. 20「いろいろな道具や、音がして楽しかった」(19 名)、No. 21「リズムの取り方、タイミング、たたき方、強弱が難しかった」(16 名)、No. 17「言葉でするのが楽しかった」(7 名)というように、聴くだけでなく、身体で表現する、楽器を鳴らしてみる、口唱歌でリズムを唱える、といった様々な活動を通して実際に作品に触れることでその楽しさや難しさを経

験している。No.17の口唱歌によるリズム唱とは、主題Aの部分を「これから打つよロンド」を2回、「ロンド●、ロンド●」、「これから打つよロンド」と唱える形で表現するもので、4学年の児童皆がすぐに覚えて表現できており、誰もが奏で手、作り手になれるための工夫の一つになっていた。

こうした身体表現、口唱歌など複数の活動を取り入れながら主体的に「ロンド」の音楽にかかわることで、音楽に対する意識も変化していることがわかる。

もう一つは活動の根底に〈遊び〉の世界の実現を追求していくということである。〈追いかけてこしよう〉(2007)のプログラムでは、児童の中から新しい言葉が旋律にのり、遊びの中で音楽が生まれていった。今回の〈音楽のサンドウィッチをつくろう〉では、そこまでの発展は無かったものの〈リズム・ロンド〉のアンサンブルの感想で多いのは「楽しかった」「おもしろかった」という思いである。「手で叩いたり、足でドンドンしたのが一番楽しかった」(No.16の一例)、「紙をやぶるのが楽しかった、また違うものもやってみたい」(No.20の一例)、「みんなで体をつかって演奏しました私はお尻で…中略…すごくおもしろかった」、「『これからうつよロンド』をやったのがおもしろかった」(No.17の一例)といった感想が多くみられる。〈追いかけてこしよう〉の報告の際にも述べたように、ホイジンガは「自然は我々に遊びを、その緊張感と喜びと『おもしろさ』と一緒に与えてくれた」と説明しているように¹⁵、「おもしろさ」を内包するものとして遊びの世界があるといえる。またホイジンガは文化についても「遊びの形式の中で発生し、はじめのうち、文化は遊ばれた(中略)文化はその根源的段階において遊びの性格をもち、遊びの形式と雰囲気の中で活動する」と述べるように¹⁶、文化を生み出したり、あるいは関わっていく際に「おもしろさ」をもった「遊び」が不可欠であることを示している。その意味で「楽しさ」「おもしろさ」を文化理解、発生に結びつける最初の段階として〈遊び〉は不可欠なものとなるのである。

三つ目には視覚的な工夫を取り入れることの必要性である。〈追いかけてこしよう〉のプログラムでは音楽理解を促進するものとして手の動きと視覚支援物を取り上げた。今回は〈ロンド形式〉の移り変わりをパンと具の絵とABACADAといった構成図を学生が示しながら鑑賞するのみで、児童らがそれを使って演奏を辿るような活動はしなかった。当初は、主題Aの部分ではパーの手、エピソードの部分ではグーの手というように、手をつかって確認する活動を予定していたものの(表1具体的活動④部分)、時間の関係で中止したこともあり、視覚支援物がどの程度効果をもったのかは分からずじまいだった。また、映像記録をみるとアンサンブルの演奏時には、主題A、エピソードBのそれぞれの演奏集団が立ち上がって演奏するようにきまりを作ったものの、教室内の配置も充分でなく、演奏集団によってロンド形式を視覚的に理解することは難しかった。本来ならば主題Aの演奏グループ、エ

ピソードBの演奏グループといった演奏集団を見ていくことでロンド形式がわかるようなフォーメーションの工夫をすることも必要であろうと感じた。今後の課題としたい。

4. 5. 参加型音楽プログラムづくりの条件の拡大

上記のことを踏まえ、プログラム構成の要件として前述の5点を修正拡大した7点を提示したい。

尚、〈1〉スタッフの多様性(複数専攻の学生)の確保については、プログラム作成時の要件のため、ここでは除いた。

- 〈1〉音楽テーマの明確化
- 〈2〉複数の楽器の活用
- 〈3〉ストーリー性(相互関連性)をもったプログラム構成
- 〈4〉①聴く(鑑賞)、②奏でる(器楽)、③歌う(歌唱)、④創る(創作)、⑤動く(身体表現)活動など多様な活動の取り入れ
- 〈5〉視覚的な工夫
- 〈6〉提供者(演奏者)と享受者(鑑賞者)との協同創造の場の設定
- 〈7〉遊びの世界の実現

7点のうち下線を引いた〈2〉〈4〉〈5〉〈7〉が新しく増えた要件である。

〈2〉複数楽器の活用はプログラム終了後の児童らの感想からもわかるように、楽器そのものに享受者(鑑賞者)を惹きつける大きな魅力が備わっており、これを十分に活用することが不可欠と考え取り入れた。

〈4〉①聴く(鑑賞)、②奏でる(器楽)、③歌う(歌唱)、④創る(創作)、⑤動く(身体表現)活動の取り入れ、については参加者の主体的取組みの促進と提供者(演奏者)と享受者(鑑賞者)との関係性、また空間をも揺さぶる力として重要であり、一プログラムの中になるべく複数の活動が取り入れられるよう配慮することが必要である。今回は、3曲のロンドによって①聴く(鑑賞)活動を行い、後半では、③歌う(歌唱)活動として口唱歌で唱えながらリズムを覚える活動、④創る(創作)活動では、班ごとに引いた2種類のカードに書かれたリズムの組み合わせの表現を工夫するという活動をとった。⑤動く(身体表現)活動は、後半の〈リズム/ロンド〉アンサンブル活動全体がそれであり、活動の中にフィンガーシンバルやギロなど楽器を使った班もあり、②奏でる(器楽)活動も取り入れたことで、複数活動によるプログラムを構成していたことになる。

〈5〉視覚的な工夫については、今回は十分に活用することができていなかったものであり、今後の課題である。

〈7〉遊びの世界の実現については、〈6〉提供者(演奏者)と享受者(鑑賞者)との協同創造の場の設定とともに、参加型音楽プログラムを構成していく上での

基底的理念になるものと考えている。

5. おわりに

本稿では、参加型音楽プログラムの企画・実施を通して芸術の提供者（演奏者）と享受者（鑑賞者）との境界線を取り除き「参加型」から「協同創造型」へと発展させるための手だてを検討し、プログラムを構成するための7つの要件を整理した。

プログラムでは①鑑賞と創造的な表現活動（②奏でる、③歌う、④創る、⑤動く）を一つのテーマで統一的に扱うことにより、鑑賞者の音楽的理解と関心を高めることができていた。特に身体感覚を使った音楽活動は、音楽理解を促進し、演奏者と鑑賞者の相互交流を深め「協同創造型」へと発展させる可能性を十分に持ち得ることも明らかであった。一方、「ロンド形式」を視覚的に明示するためのフォーメーションの作り方、鑑賞時に明確に区分された演奏者と鑑賞者の空間の配置の仕方、1回のプログラムの中で創作を取り入れる方策などの課題が残った。また、今回のプログラムで「ロンド形式」の理解を明確に意識した児童が多かったものの、説明が若干多く、音楽授業な性格をもっていた。音楽的意図、教育的意図をもっていたとしても、文化の根源的性格である〈遊び〉の世界を生み出せるようなプログラムを作成することも今後の課題であろう。

引用文献

- 1 神戸女学院大学音楽学部『アウトリーチ通信 創刊号』2006年2月15日、p.2.
- 2 林 睦「音楽のアウトリーチ活動に関する一考察—日本における導入の10年と今後の課題」日本音楽教育学会編『音楽

- 教育学の未来』音楽之友社、2009年、p.280.
- 3 拙稿「身体表現を取り入れた参加型音楽コンサートの可能性—カノンの理解を目指した『追いかけてこしよう』の事例から—」『和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要』No.18、2008年、p.122.
- 4 「コンサート」=「演奏会」松村明編『大辞林』（第3版）三省堂、2006年、p.294.
- 5 「ワークショップ」同上書、p.2731.
- 6 「ワークショップ」松村明監修『大辞泉』小学館、1995年、p.2840.
- 7 「プログラム」前掲書 注4）p.2260.
- 8 前掲書、注3）pp.121-122.
- 9 「ロンド形式」下中弘編集兼発行人『音楽大事典第5巻 平凡社、1998年初版第15刷（1983年初版第1刷）、p.2840.
- 10 《リズム・ロンド》”Rhythmic Rondos”は以下の楽譜を使用した。Calf Orff, Gunild Keetman, Orff-Shulwerk Music for Children vol. I English version adapted by Margaret Murray, ed., by SCHOTT & Co. LTD. p.67.
- 11 楽譜は以下ものを使用した。「18. Rondeau」多田逸郎編『ソプラノリコーダーと鍵盤楽器のためのバロック小品25曲選』全音楽譜出版社、出版年不明、p.34.
- 12 弦楽ピース楽譜 F.クライスラー作曲「ベートーヴェンの主題によるロンディーノ」SJS-018 Vn./Pf. ショットジャパン。
- 13 「オルフ」日本音楽教育学会編『日本音楽教育事典』音楽之友社、2004年、pp.97-98.
- 14 同上書、p.128.
- 15 ホイジング著・里見元一郎訳『ホモ・ルーデンス』河出書房新社、1971年、p.14.
- 16 同上書、pp.86-87.

